

「梅ヶ島災害50年事業」の開催報告 ～忘れない 未来への継承～

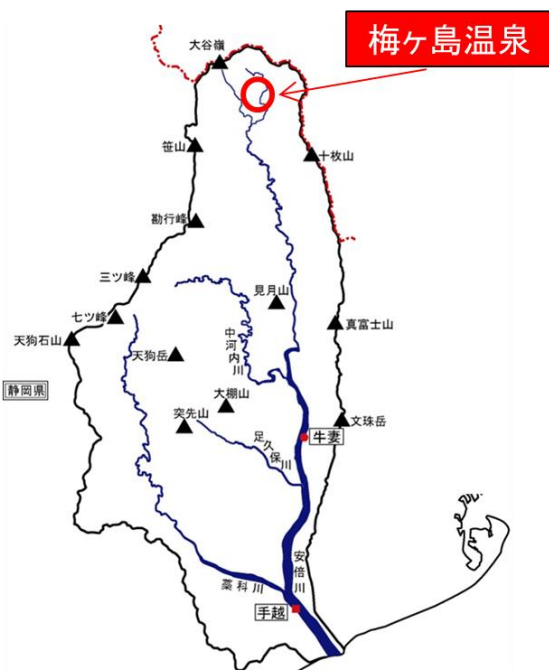
道田 剛

静岡河川事務所 調査課（〒420-0068 静岡市葵区田町3-108）

昭和41年の梅ヶ島災害から50年の節目を迎えることを受け、災害の記憶を風化させず、教訓として継承し、今後も土砂災害に備えた地域づくりを目指すための「梅ヶ島災害50年事業」を実施した。上流だけでなく、下流域の子ども達も含めた地域住民や関係機関と幅広く連携した積極的な啓発活動など、未来を志向した多くの取り組みを紹介する。

キーワード：梅ヶ島災害50年

1. はじめに



昭和41年、安倍川上流域に異常な豪雨をもたらした台風26号により、静岡市の奥座敷と呼ばれる梅ヶ島温泉で土石流が発生し、26名の尊い命が奪われたほか、道路や農作物、山林など甚大な被害が発生した。

梅ヶ島温泉をはじめ安倍川流域では、この災害後50年間で、砂防・地すべり対策、治山対策、交通網の整備及び防災情報施設などインフラ整備が進んだことで、地域の安全度が高まり、大変住みやすい地域となったが、一方で、災害に対する危機意識が薄れつつある。

平成28年は梅ヶ島災害から50年という節目の年を迎えることから、静岡河川事務所では関係機関と連携して、忘れかけた記憶を思い起こし、改めて災害の実態を認識

すると共に、教訓として後世に継承し、今後も地域とともに土砂災害に備えた地域づくりを進めていくことを目指し、「梅ヶ島災害50年事業」を実施。

ここでは、災害の概要とともに、約10ヵ月にわたり取り組んできた各種の取り組みを報告する。

2. 「梅ヶ島災害の概要」

梅ヶ島災害は、昭和41年（1966）9月25日、安倍川上流域で1時間最大雨量113ミリを記録した台風26号の集中豪雨により発生したもので、11軒の家屋が全半壊し、旅館や土産物店などが土石流にのみ込まれ、宿泊客ら26名が亡くなる大惨事となった。また、下流の大河内村においても、大河内中学校の裏山が突然崩壊し、校舎2棟が全壊、1棟も土砂が流入して使用できなくなった。



土石流にのみ込まれた梅ヶ島温泉旅館

（提供：（株）静岡新聞社）

3. 取り組み一覧

【取り組み一覧】

日 付	行事名	対象者・人数	開催場所	実施体制
4月12日	出前講座	大河内中学校（13名）	大河内中学校	静岡河川事務所
4月22日	出前講座	賤機中小学校（20名）	賤機中小学校他	静岡河川事務所
5月17日	地域探訪	大河内中学校（3名）	大河内地区	大河内学区連合自治会 静岡河川事務所
5月24日	出前講座	梅ヶ島小中学校（22名）	梅ヶ島小中学校	静岡森林管理署 静岡河川事務所
6月17日	式典・防災講演会	同上（約500名）	梅ヶ島小中学校体育館	実行委員会 ※1
9月21日	慰霊祭	—	台風接近により中止	実行委員会
9月27日	フィールドワーク	賤機中小学校他2校（26名）	安倍川流域	実行委員会
10月12日	記念碑除幕式	地域住民等（約100名）	梅ヶ島温泉、大河内中学校	実行委員会
2月11日	タイムカプセル開封式	地域住民等（約200名）	梅ヶ島婦人会梅園	実行委員会
5月 6月 9月	パネル展	地域住民等	真富士の里（集客施設） 黄金の湯（ ” ） 静岡河川事務所（国） 静岡土木事務所（県） 静岡市（市） 安倍こころ（集客施設）	静岡県 静岡市 静岡河川事務所

※上記の取り組みを実施するため、平成28年1月以降、計7回の実行委員会を開催。

※1 実行委員会（梅ヶ島災害50年事業実行委員会）
国土交通省静岡河川事務所／林野庁静岡森林管理署／静岡県／静岡市
梅ヶ島学区自治会連合会／大河内学区自治会連合会／（一社）静岡建設業協会
（一社）中部地域づくり協会

4. 治山・砂防出前講座

6月の防災講演会に先立ち、地元及び下流域の小中学校の児童生徒を対象に、郷土の災害史や治山・砂防対策の現状について学ぶ出前講座を開催した。

なお、講師は国土交通省及び林野庁の両機関の採用1、2年目の若手女性職員が務めた。堰堤の効果などを小・中学生に説明することで、より理解を深めることができ、行政担当職員のスキルアップにつながった。



若手女性職員による出前講座

5. 地域探訪



50年前の土石流災害について語る三浦会長

地元中学校の生徒を対象に、地域を巡り土砂災害の歴史を学ぶ地域探訪を開催。静岡河川事務所梅ヶ島出張所の鈴木所長が講師を務め、砂防事業の目的やこれまで実

施した土石流対策などの説明をした。また、郷土の自然や地形、災害の歴史などに詳しい大河内学区自治会連合会の三浦会長にボランティアガイドをお願いし、大河内中学校の被災状況などを説明してもらった。

6. フィールドワーク

安倍川下流域の小学生児童を対象に自然体験イベントを開催。

我が国の三大崩れの1つである大谷崩で工事用モノレールに乗り植樹を体験したり、川原の石の観察など、楽しみながら山の崩壊状況と、現在進めている砂防対策の必要性などを学んだ。



崩壊地の斜面で植樹活動する児童たち

7. 災害パネル展

50年前の土石流災害の様子を映した写真パネルを、静岡県や静岡市等、各機関の協力の下、安倍川沿川の集客施設や各行政機関の玄関ロビーなどに展示し、地域住民や施設を利用される方々に、当時の被害状況を認識してもらった。なお、掲載した写真は(株)静岡新聞社より提供していただいた。



災害パネルの展示状況（静岡土木事務所ロビー）

8. 式典・防災講演会

6月17日（金）、静岡市立梅ヶ島小中学校の体育館で開催した「梅ヶ島災害50年式典及び防災講演会」は2部構成で行い、50年前に土石流災害で亡くなられた方々を

追悼するとともに、土砂災害に対する理解を深め、土砂災害をはじめ近い将来発生の恐れが高まっている東南海・南海地震など大規模な自然災害に備えることを目的として、地元小中学生や地元住民、土木を専攻する高校生、行政機関など約500名が参加した。



式典会場（梅ヶ島小中学校体育館）

【開催日】 平成28年6月17日（金）	
【場 所】 静岡市立梅ヶ島小中学校 体育館	
【参加人数】 約500名	
【主催】 梅ヶ島災害50年事業実行委員会	
【次第】	
■ 第一部 式典	13:
00 開式	
13:20 映像紹介（災害当時の記録映像）	
13:35 梅ヶ島災害と砂防事業紹介	
13:45 ビデオレター	
「昭和41年 足和田災害」	
山梨県富士河口湖町長	
■ 第二部 防災講演会	
14:00 基調講演	
「土砂災害はどのくらい危険なのか」	
静岡大学農学部准教授 今泉文寿氏	14:40 災
害体験者の体験談	
15:20 学習発表会&治山・砂防出前講座の	
紹介	
15:55 未来へのメッセージ	
16:00 閉会	



災害パネル展示の様子

(1) 第1部「式典」

まず始めに、犬飼一博静岡河川事務所長が挨拶に立ち、「安倍川上流域は危険性が高い。経験や記憶を教訓として次世代へ繋ぎ、土砂災害に備えた地域づくりを目指していきたい」と話し、田辺信宏静岡市長は「多くの先人たちの思いを受け、未来に向けて安全・安心な地域にしていきたい」と挨拶いただいた。

その後、災害当時の記録映像を上映し、この50年間の砂防対策の歩みについて紹介。また、50年前の同じ台風26号で、大規模な土石流被害が生じた「足和田災害」の被災地である富士河口湖町（旧足和田村）の渡辺喜久男町長から寄せられたビデオレターを披露した。



田辺静岡市長による挨拶



渡辺富士河口湖町長によるビデオレター

(2) 第2部「防災講演会」

第2部では、最初に「土砂災害はどのくらい危険なのか」と題し、今泉文寿静岡大学農学部准教授が基調講演を行い、実際に安倍川源頭部の大谷崩で発生した土石流の映像を見て、土石流の恐ろしさを伝えた。

続いて災害を体験された方による体験談、大河内中学校の生徒らによる学習発表会などが行われた。最後に、梅ヶ島小中学校の児童生徒らが未来へのメッセージを発表し、「50 年前の災害を自分たちが伝えていく」と力強く宣言した。



災害体験者による体験談



未来へのメッセージを宣言した児童生徒たち

式典後、アンケート調査を実施した結果、講習会や学習発表会を受け、「日頃から防災に対する心がけを忘れない」、「防災訓練を実施する」等の意見が多数寄せられ、地域住民の防災意識を変えることができたと感じられた。

9. 記念碑の建立

今回の50年事業は、地域住民はもとより、次世代を担う若者や子供たちも含めて、地域全体で今後の防災について考えた。こうした取り組みを後世に引き継ぐため、災害を受けた2箇所に記念碑を建立し、10月12日（水）、総勢100名を超える方々が見守る中、除幕式を行った。



記念碑除幕の様子（静岡市梅ヶ島温泉）

10. タイムカプセル開封式

安倍川直轄砂防事業50年（昭和42年）事業の一環として、静岡市と静岡河川事務所が主体となり、梅ヶ島婦人梅園にタイムカプセルを設置した。当初50年後（直轄砂防100周年）の開封予定であったが、梅ヶ島災害50年事業を通じて地域住民からタイムカプセルを開封したいと強い要望を受け、開封式を行った。



開封式の様子（梅ヶ島婦人梅園）

11. おわりに

今回の一連の取り組みは、静岡河川事務所を中心とした実行委員会メンバーによる直営で実施計画を策定し実施した。綿密な打合せを重ね準備を進めたため、地域全体が連携を図ることができた。その結果、手作り感の味のある内容となり、参加をいただいた多くの方々から共感の声をいただくことが出来た。

今年は「安倍川直轄砂防80周年」にあたる。この催しが、過去の災害教訓として次世代に伝承され、さらには地域の防災に関わる各組織や住民の皆様が、今後の自然災害について考えるきっかけになることを祈念する。